

英雄の虚像

上野直蔵

同志社大学をこのたびご卒業の諸君、おめでとうございます。拙い祝辞を申し述べることをお許しく下さい。まず、新島襄『同志社大学設立の旨意』から短い一節を引用することから始めさせていただきます。

「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず……実に一国の良心とも謂ふべき人々なり……。」

× × × × × ×

ところで、王選手や長嶋監督がやめたり、やめさせられたりして、プロ野球の世界にも英雄不在の時代が来た、などといわれていますが、それでいいのだ、という人もいます。特にひとりの

看板選手にたよらず、ひとりひとりの選手がチームの中で時宜に応じてその機能を發揮していく広島やヤクルトなどというチームの方が昨今は成績がよろしい。あえて独りの英雄に依存しなくてもいい、というのですが、どうもそれでは興行的に困るらしい。そこで、人気チームに英雄を、ということで、スポーツの世界にも一人の英雄候補を獲得するために伝統のチームが権謀術策の限りをつくす。はては国政にたずさわる代議士まで動員されて、そういう権謀術策が正当化される。どうもこうなると英雄というものは政治的配慮のあやつり人形であるかのような錯覚をおこします。大相撲でも、横綱、大関を興行的に待望するものですから、実力不十分の横綱、大関を急造して、世の批判をあび、かえって興行的にマイナスになるようなことさえあります。

さきほどから、英雄、英雄と申しておりますが、一体英雄とはなんだろうという疑問が湧いてきます。古い中国の文献に、草の秀でたものを「英」とし、獣の抜群なるを「雄」とする、ということがあって、それで人の文武に秀でたものを「英雄」とした、とあるらしいのです。つまり文武に秀でたものが英雄であります。文武両道などと申しまして、昔から人格形成の理想像としています。文なら文、武なら武、どちらかに秀抜さがかたよりがちなのが人間的であるとするとすれば、英雄とはまさに超人的な理想像ということになりましたか。ですからしばしば民族の理想を詠いこむ叙事詩の主人公として登場し、読者はせめて及ばぬまでもそれにあやかりたいと希求し、時には感傷の同情もよめます。

古来、どのような人物が英雄とされているのでしょうか。英雄といえはナポレオンが思い出されません。コルシカ生れの一士官、覇気と不屈の精神、数々の武勲、帝位、ヨーロッパを席捲、モスクワ

遠征の失敗、失脚、流刑、脱出、復位、再度敗戦、ふたたび流刑、流刑地での最後。最近では毛沢東などが英雄視されてきました。中国革命の達成者、卓抜した軍事指導家、その開明思想、詩人としての評価、中国流に言えば、文武の両域において、人間として完全に達したものとしてほとんど神格化されていたようです。どうやら英雄に共通している要素として、立身出世、悲劇性、カリスマ的神格化というようなものがあるようですが、この超人的完全人間としての英雄も、見方を変えますと侵略主義者であり、独裁者であり、権力渴望者であり、ある時には自己陶醉者でもあり、エゴイストだと見ることもできるわけでして、それは最終的には人々の重荷になる要素を十分にはらんでいるのであります。英雄、と一口に申しましてもどの基準でみるかで評価は一変いたします。そういう英雄評価の不安定さをわたしたちは現実の政治や一国の権力闘争の中で、昔の語り草としてではなく、現実のものとしていろいろのかたちで確認しております。多元化した社会、多様化した個人の視点の中で現存する英雄も、過去の英雄も、否定され始めています。スポーツや芸能の分野でも、ヒーローたちは「流れに浮ぶたかた」のように「かつ消え、かつむすび」の有様で、昔のように芸能人が確立した長い評価をファンからいただくことが稀になっていくようです。第一、すぐに常識的に自分でシラケきってちゃっかりと潮どきに引退してしまふ。まこと非超人的ではありません。

英雄といっても、ことほどさように、両刃の剣の性質をもっておりまして、人間の真の幸福にとって、なにがなんでも待望されなければならないものでもない、ということになります。個人の国家への善意ある意志が、英雄の権力保持への意志によって無惨にもたたきつぶされ、生活、信条は

おろか、生命までも危きになる。個人の良心は英雄にとって危険な存在である。それはあたかも英雄が個人の良心にとって危険な存在であるのと同じであります。英雄への条件としての覇気や、不屈の精神、指導力、自己犠牲の精神、そういう一人物の英雄へのプロセスは我われを惚れ惚れさせます。ところが古今の歴史の示しますように、一たん英雄たりおおせたあとのその人物の自分を愛する醜さは、しばしば、国家と人民への重荷となります。だからそういう英雄にはユーモアさえ理解する能力がない。自己にとらわれているからです。

卒業生諸君、これから諸君は、おのがじし選びとつた分野で、物心両面の生産社会に身を投じられるわけですが、自分の生活、生命条件のみを愛する、自己にとられた名とげたる英雄の姿を選びたもうな。わたくしたちは、虚構の世界の超人的英雄には情熱的に、かつは感傷的に共感することはできません。しかしそれは生身の人間でない人物に託する欲求願望の充足からくる娯楽なのであります。現実の英雄の自己保身と自己愛は時にはおぞましくさえあることを認識しなければなりません。「英雄人を欺く」という格言がよくこの間の消息を物語っているように思います。いかなる状況、いかなる椿事にも、人民や他人を欺かない、自己をまもるために他人を欺かない……。英雄きどりの政治家や企業家、そういう人がいたらお目にかかりたいくらいです。むしろ心貧しく、おごらず、地におちた「一粒の麦」として、いつにても、己れの信ずる価値を最終のよりどころとして、たくましく、楽しく、時にはユーモアも解して生きていくこそよけれ。それが、国への、社会への無言の警告であり、木鐸であり、「地の塩」であり、良心なのであります。諸君、「一粒の麦」となりたまえ、「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。し

かし、もし死んだなら豊かに実を結ぶようになる」(『ヨハネによる福音書』十二、二四～五)からです。「自分の命を愛する」英雄は神慮の皮肉により「それを失い」、「この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命にいたる」であろうからであります。自己にとらわれて自己を愛する英雄は自らを縛り、自らを不自由にし、かえって自らを失うのです。英雄の共通要素としてある悲劇性というのもこういう皮肉によるものでありましょう。この「一粒の麦」というのは、イエスが多くの人々の救いのためにその生命を捨てたことを象徴的に言ったものですが、一般に犠牲的な愛の行為を意味する言葉となっています。

諸君、私は決して諸君たちすべてに、完全に自己を空しうして日夜ただただ自己犠牲を意識して愛の業にはげむ、真面目でやさしくめつつらをしたクリスチャンたれ、とは申しません。しかし同志社の学園生活で、有形無形に体得したにちがいないこの神の真理の現実たるイエスのことばやおこないを社会生活の真理として歩んでいただければ幸いです。「真理はなんじらに自由を得さすべし」であります。明德館の塔に刻まれている言葉であります。ご静聴を感謝いたします。

(同志社総長)

ローマ人への手紙

松山義則

ローマ、ヴァチカンのサン・ピエトル寺院の入口の重い扉には、十字架につけられ、鉄鎖につながられて苦痛にうちひしがれている聖徒たちの姿がうき彫りにされている。ローマ人への手紙のなかで聖書は、「愛には偽りがあってはならない。兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい。貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい。あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない。喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。あなたがたは、できる限りすべての人と平和に過ごしなさい。もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである。悪に負けてはいけなさい。かえって、善をもって悪に勝ちなさい。」と教えています。迫害のなかであって、その命を失っていった原始教会の人々も、このパウロの書翰に力づけられて残された生命の間に、祈り、愛し、たえてきたものと思えます。このローマ人への手紙

の教えは、まことにきびしく、人間のできぬ業を書いていると思います。

人間の行う愛は、もともと自分を中心にした愛でしかありません。自己犠牲も深く反省してみると自己陶醉的であることに気づきます。兄弟の愛をもっていつくしみ合い、尊敬し合うということも、競争社会で成長してきたわれわれにとっては多くの場合、いがみ合い、しつとし合う心にとりつかれてしまいます。自分を迫害し殺そうとする相手をのろうことなく、むしろそれを愛し祝福するなど実際にできることでしょうか。競争相手の喜びをともしするよりも、憎しみと怒りが生じます。飢えた敵に食をあたえ、乾きにあえぐ敵に水をのますなどに至ってはまさに利敵行為であり、敵を強くさせ、自らを破滅に導く結果を生じる外はありません。

この聖書の教えがいかに美しく理想的なものであっても、人間の努力や心がまえだけでは為しうるものではありません。まさに人間は本来、自己保存的であります。人間のあり方は多様であり、立場もことなり、見方もちがいます。このような人間が社会を構成し、互に生きていくために協力的、建設的な関係を維持しようとしています。このことも集団としての人間が自己保存のためになす業にしかすぎません。

人間は人間の姿で、ものを考え感じるという限界のなかで、自己を主張し、他者を理解しそして協調するというくりかえしが人間の現実であります。人間はひとりひとり自分の世界をもち、自分の生涯を生きつづけ、一刻一刻、いま、時が生み出されている世界の内にあって、人間はその生命を燃焼させています。真実の生活が実現されるためには人間の意欲や願望、そして努力だけではむなし結果となるではありません。人間性を超越した、大いなる力の助けなしにはこのことは不可能であります。この天地のなかに存在する力を信じ、これに帰依し頼るところから、われわれ人間

の努力が生き支えられ、希望がわき上ると思っています。

コリント人への第一の手紙のなかで、「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」とパウロは教えています。人生とは苦難にたえ、戦い、歩みつづけるものでありますが、ひとびとの直面する試練は決して耐えがたいものではなく、また、それをのがれる道も用意されているのであります。

この春、数多くの学生諸君を新しく卒業生として社会に送り出すこととなりました。同志社大学において四年間、人生にとってもっとも貴重な青春のときをすごされ、これが人格の形成に力強い影響をあたえたと思います。同志社人のひとりとして卒業生諸君が、力にあふれ、勇気をもって人生の第一歩を社会に向けて歩み出していただきたいと念願しています。迫害のなかに苦悩にみちた日々を送った聖徒たちは、自分を越えた力を確信し、その愛を信じ、自分に備えられた人生の道を強く歩みつづけたように、希望と明るさを失うことなく新しい世界におどり出て下さい。十六万人の校友たちのなかに加わって、同志社人たるの自負と自信をもって社会の有用な一人のひととして健在して下さいと信じています。われわれは人生のこの世における旅人たびであります。旅人をねんごろにもてなすように」という教えにしたがって、孤独であり、不自由な旅の日々にある人々をもてなし、互に力づけあい、協力して人生の道を歩みたいものと思います。青春の時代の母校、同志社をときに想起され、大学を再び訪れて下さるよう願います。卒業生諸君のご健康とご幸福を心から祈ります。

(同志社大学長)

心の豊かさを

岡野久二

みなさん、ご卒業お目出とうございます。また、今日まで、みなさんの背後にあって、常にみなさんを見守って来られたご父兄に対して、心からお祝いを申し上げます。四年前に、大学入学の喜びと共に、期待と不安を交差させながら大学の門をくぐったみなさんは、今、無事に所定の学業を終えて、卒業の喜びの中に、将来の夢と希望を胸にして、学窓を巣立ってゆかれます。

みなさんのこれから出てゆかれる一九八〇年代の社会は、二十一世紀に向けて激動と転換の時代に入っており、日本を含めた国際社会も大きく揺れ動いています。国際政治を眺めてみますと、アメリカとソ連を頂点とした、いわゆる戦後の二極陣営の時代は崩壊しつつあり、世界の政治を左右する力が多極化してきています。経済面においても同様であり、産業革命後、およそ二〇〇年の間、世界各国は物質的に豊かになることが人類の進歩であると信じて、工業を中心とした産業の発展に努力してきましたが、その結果、物質的な生活は豊かになった反面、自然破壊や汚染という公

害が生活を脅かしはじめ、脱工業化ということが将来の重大な問題となり、無資源国のわが国にとつては、資源・エネルギーの有限性が益々深刻な問題となつてきています。つまり、政治的にも経済的にも新しい秩序を求めて世界は大きく転換しつつあります。しかし、その転換の渦の中に巻きこまれている現代人にとって、それがどのような形で収束するのか解らないのが現状でありますので、現代は不確実性の時代とか、混沌の時代とか呼ばれています。こんな時期が今後、何年続くのか容易に予測することはできませんが、みなさんはこういう時代に生きてゆかねばならないのであり、この激動と不確実性の時代を切り開いてゆく責任を双肩に荷なっているのです。

そこで思い起こして頂きたいのは、みなさんが同志社で学ばれた意義であります。同志社はご存じの通り、明治八年に新島襄先生によって創立されたのでありますが、当時、幕末から明治にかけて、日本は近代化への大転換期を迎えており、新島先生は、その新しい時代を背負ってゆく人材を養成し、世に送り出すことを念願されたのであります。先生は、「同志社大学設立の旨意」の中で、「一国を組織する教養あり、智識あり、品行ある人民」、「即ち此の国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す」と述べられています。未開国から文化国家への脱皮を計るわが国の激動期を支えることのできる、「一国の良心とも謂ふ可き」人材が、明治の転換期の活力となることを期待されたのであります。

現代も、その内容は異なるとはいえ、明治のそれに勝るとも劣らぬ転換期に直面しています。こんな時代に生きてゆくことは大変困難なことではありますが、このような時代の転換期に生きぬき、新しい時代を創造してゆく人材を生み出してゆくのが同志社の使命なのであります。だから、同志社で学び、同志社において貴重な青春を燃焼させたまなさんは、この困難な時代を生きること躊躇

踏ちよすることなく、「一国の良心」として、誇りをもって、堂々と時代に挑戦して欲しいのであります。

工業を中心とした物質文明の発達は私たちの日常生活を豊かにし、便利にしてまいりましたが、心を豊かにすることはできませんでした。今日ほど物質と精神の調和がくずれたことは過去にその例を見ません。これも物質文明の極度の発達をもたらした悪い結果であり、物質文明の在り方そのものが、問われている所以ゆゑであります。現在のように、社会構造が複雑化し、生存競争が激しくなると人間性がゆがめられてくるのは当然であります。みなさんは、こんな時代を生きてゆかねばならないのです。しかし、みなさんは、キリスト教を教育の基本とする、この学園に学ばれて、こうした難かしい時代に対処できる強い精神力を養やしなっておられるはずで、「人はパンだけで生きるものではない」と聖書に書かれています。みなさんは、この学園において、人間の幸せが、決して、物質、金銭、名誉、地位などによって作られるものでないことを充分学んでおられます。「自分を愛するようにあなたの隣となり人を愛せよ」というイエスの言葉に代表される、愛の精神がみなさんの血となり肉となっております。もちろん、実社会においては、生きてゆくための課題を遂行するための知識や能力が必要であり、みなさんは、その基礎を大学において修得されてきました。今後一生を通じて、その知識を豊富にし、能力を存分に發揮するための努力を惜しんではなりません。その基になるのは心であります。難かしい問題に立ち向ってゆく気力、隣人を愛する心、幸福を自分の手で作ってゆく主体性など、常に心の豊かさを目指して、物質に毒されない、充実した人生を送られるよう祈ってやみません。

(同志社女子大学長)